台大日本語文研究第 20 期
2010 年 12 月，頁 37-60
2010-10-24 收稿，2011-01-20 通過刊登

戰後日本女性文學中的性幻想
—以河野多惠子的「獵童」為例—

陳美瑤*

摘要

第二次世界大戰後日本的新興女作家，不約而同的以或擬態或諷刺或怪誕詭譎的手法創造出幻想的世界，藉以挑戰日本戰敗後卻仍根深蒂固的「家族國家」意識型態及男性宰制的兩性關係。例如河野多惠子常以令人毛骨悚然的施受虐狂男女關係以及血腥虐待、殘殺男孩幻想的主題，刻畫女主角藉由「異常心理」與「異常性愛」來探索女性追求情慾的極致，進而發掘女性個體存在的意義，並顛覆女性天生具有母性的傳統神話。

本研究計畫將運用精神分析理論、性別理論以及觀視理論，深入探討河野多惠子作品中的女主角如何透過戀童、虐童的幻想，於男性所主導的社會中表達女性的自我主張、大膽地追求情慾，進而顛覆傳統文化中的性別論述。主要文本分析對象爲河野多惠子於 1961 年震撼文壇的代表作「獵童」(「幼児狩り」)，試圖爬梳女性作家如何透過如此血腥殘虐的幻想作品，反映出當時政治時空與文化脈絡下強加諸於女性軀體之性別符號，以及女性如何在此性別窠臼下採取越軌的策略，藉由異常的幻想追求女性情慾進而建立其主體性。本研究計畫希望能夠提供對河野多惠子作品深度的解讀，並一窺戰後女性作家選擇以幻想爲其寫作策略所隱含之性別政治企圖。

關鍵詞：河野多惠子、「獵童」、幻想、施受虐狂、女性情慾

* 文藻外語學院日本語文系助理教授

Sexual Fantasy in the Postwar Japanese Women's Writing —Kōno Taeko's "Toddler-hunting" —

Chen, Mei-Yao*

Abstract

Among the Japanese women writers of the 1960s and 1970s, Kōno Taeko explored some of the most offensive themes, such as sado-masochism, infanticide, and presented some of the most disturbing images like bloody maltreatment of young boy in her fantastic stories that were arguably intended to deconstruct the confined gender roles in society and to challenge the rigid Japanese family system in Japan. In light of psychoanalytic theory, gender studies and gaze theory, I will employ text analysis to examine the context of one of Kōno's representative short stories, "Toddler-hunting," (1961) in order to discover one of the no less significant women's writing strategies.

This research is intended to provide in-depth feminist theoretical interpretation of Kōno's writing in particular, and to explore the sexual-political ambitions of the Japanese women writers in general wherever they employ stunning fantasy as their writing strategy.

Keywords: Kōno Taeko, "*Toddler-hunting*", fantasy, SM, female Sexuality

* Assistant Professor, Department of Japanese Language, Wenzao Ursuline College of Languages

戦後女性文学におけるセクシュアル・ファンタジー
—河野多恵子の「幼児狩り」を軸として—

陳美瑤*

要旨

敗戦後、それまで女性を抑圧し続けてきた制度の崩壊によって、女性作家は女性という自己に向かい合いながら、自由自在に自己表現を求められるようになった。一九六〇年代の女性表現は、まだモデルのない新時代の、しかも最先端をいく女たちの抱える内的分裂、セクシュアリティの不安、男性との性的関係の決裂、家族や母性からの逃走などをテーマとするところから始まった。

本稿では精神分析とジェンダーという視点から河野多恵子の作品におけるサド・マゾ嗜好の男女性愛関係と、女主人公のエロティックな志向に基づく子供に対する残酷な虐待幻想の意味合いを読み解き、女性作家として河野が如何に女性のエロスの位相で女自身の快楽を追求し表現したかを解明しようと思う。主な分析対象は新潮同人雑誌賞を受け、注目された「幼児狩り」（1961）とする。問題作と思われる「幼児狩り」だが、この作品における「性」というテーマに投げかけた子供への偏愛と被虐的な感受性が、河野の後期の作品にまで続く主なトピックだからである。この作品を深層から読み解くことを通して、河野が如何に戦略的に「倒錯」や「狂気」を用い、従来の女性作家が踏み込まなかった領域までをも開拓し、不条理を生きる女性が自主性を獲得したか、その過程が垣間見られるのではないか。

キーワード：河野多恵子、「幼児狩り」、幻想、SM、女性性

* 文藻外語学院日本語文系助理教授

セクシュアル・ファンタジー
―河野多恵子の「幼児狩り」を軸として―

陳美瑤

一、目眩く時代

一九四五年八月十五日、十五年も続いた長い戦争は日本の敗戦によって終わった。米国をはじめとする占領軍が主導した「日本国憲法」は政治、社会、教育、人権などの各分野においてさまざまな変革をもたらし、日本の国民に大きな影響を与えた。それまで言論の自由を圧殺されて生き残った作者たちにとって敗戦がもたらした変革は歓喜であった。とりわけ、それまで女性を抑圧し続けてきた制度の崩壊によって、抑圧の構図や仕組を知覚、認識し得ていた女性たちは、女性という自己に向かい合いながら、自由自在に自己表現を求められるようになったということに欣喜雀躍した。

戦前すでに文壇で活躍していた女性作家は戦後直ちに、男性作家の活動に引けをとらぬ、自分の身体で体験したものをもとにし、リアリズムの技法で戦争で台無しにされた人生と家族を描こうとしていた。平林たい子、林芙美子、宮本百合子、円地文子など窒息的儒教的教義に縛られて女作りされた世代の女性作家は、制度下の父の娘、夫の妻、子の母として辛い役割を負わされた女たちが生き延びている姿を鮮やかに描いた。ともあれ、女性作家の表現が大きく変わり、女性文学が絢爛と開花したのは一九六〇年代に入ってからと言えよう。

占領軍の力によるものだったとはいえ、人権を持つ「人間」と見なされなかった女性たちがはじめて参政権を獲得し、不敬罪・姦通罪廃止などさまざまな革命的変化を手中に収め、男女平等を建前とする共学教育も受けられるようになった。この共学教育で成人した世代が登場して、時勢を大きく変化させた。このように新憲法により法的には男女平等が実現されたが、それによって女性たちは男性

中心社会を変化させていく力を手に入れ、家父長制の息苦しい束縛から自由になれるというわけにはいかなかった。

一九六〇年代の高度経済成長期に入ってから、労働力は農村から都市へと移動し、従来の家制度の意識が薄れ、核家族による志向が強くなる。女性の社会進出は進んだが、労働市場においてはやはり差別待遇がある。国や企業は家庭における女性の役割を強調し、家計補助型の労働力として女性を位置づけようとした。また、女性には仕事に献身する夫を支える「企業戦士の銃後の妻」という役割が期待され、家庭に限定されるということは戦前とあまり変りがなかった。現代化によって男性と平等になったはずの女性が抱える矛盾と閉塞感は解消されるどころか、むしろそれを強める形で展開したともいえるだろう。

一九六〇年代の女性表現は、まだモデルのない新時代のしかも最先端をいく女たちの抱える内的分裂、セクシュアリティの不安、男性との性的関係の決裂、家族や母性からの逃走などをテーマとするところから始まった。例えば、河野多恵子（1926-）、金井美恵子（1947-）、高橋たか子（1932-）、倉橋由美子（1935-2005）、津島佑子（1947-）などにおける擬態的、風刺的な手法で築かれた幻想的な世界に現れる近親相姦、サドマゾヒズム、記憶喪失症、幼児殺害、カニバリズム、身体切断、容貌への危害などといった女性の狂気は、水田宗子の言葉を借りれば、「性の抑圧に抗する心身の自己表現の回路」なのである[1]。こういう狂気の表現によって、女性が自らの内面に深く分け入り、拘束されてきた女のセクシュアリティを問い直すことができるのである。

柘植光彦によれば、倉橋由美子、河野多恵子、森茉莉の三人の大型作家の登場は女性文学の表現を大きく変える役割を果たしたという[2]。彼女たちの文学における性表現は女性独自の感覚に根ざしてお

[1] 水田宗子編集（1991）『ニュー・フェミニズム・レビュー２　女と表現―フェミニズム批評の現在 vol.2』学陽書房 P.36。
[2] 柘植光彦（1979）「現代女流作家における性表現」『国文学解釈と鑑賞』44（5）P.119。

り、男性作家には不可能な領域に属している。殊に、初めて女の側からマゾヒズムの快楽の世界を描いて見せた河野多恵子の作品は画期的なものだといえる[3]。

本稿では精神分析とジェンダーという視点から河野多恵子の作品におけるサド・マゾ嗜好の男女性愛関係と、女主人公のエロティックな志向に基づく子供に対する残酷な虐待幻想の意味合いを読み解き、女性作家として河野が如何に女性のエロスの位相で女自身の快楽を追求し表現しているのかを解明しようと思う。主な分析対象は新潮同人雑誌賞を受け、注目された「幼児狩り」（1961）とする。問題作と思われる「幼児狩り」であるが、この作品における「性」というテーマに投げかけた子供への偏愛と被虐的な感受性というのは、河野の後期の作品にまで続く主なトピックだからである。この作品を深層から読み解くことを通して河野が如何に戦略的に「倒錯」や「狂気」を用い、従来の女性作家が踏み込まなかった領域までをも開拓し、不条理を生きる女性が自主性を獲得したか、その過程が垣間見られるのではないか。

二、先行研究について

一九二六年河野多恵子は大阪のある山産物の問屋の次女として生まれた。いわゆる「戦中派」に当たる河野は戦時体制の下に少女期と青春期を過ごした。四四年、大阪府女子専門学校の国語科を受験して失敗したが、女子挺身隊を逃れようと、第二志望の経済科に入学した。学生時代は人形浄瑠璃の夢幻性や谷崎潤一郎、泉鏡花の文学に親しみ、それら幻想的、耽美的な非リアリズム文学の影響を強く受けた。一方、英文学にも関心を持つようになり、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』に深い感銘を受けた[4]。

---

[3] 柘植光彦、前掲書 P.121。

[4] 河野多恵子の生い立ちについては、与那覇恵子の「河野多恵子」『女性作家シリーズ』と、吉川豊子の「骨の肉　河野多恵子」『現代短編女性文学』と、Sachiko Schierbeck's "Kōno Taeko," *Japanese Women Novelists in the 20th Century 104 Biographies 1900-1993* を参照した。

多くの学者が指摘するとおり、青春時代の戦争体験は河野多恵子の文学の決定的な要素となった。例えば、大久保典夫は河野多恵子の「被虐的な感受性」は「戦中の抑圧の中で原型が作られた」と説いているし[5]、神田由美子は、河野多恵子の女性像は戦争体験がもたらした「凌辱感」に支えられ、「異常性愛」を志向するヒロインたちの姿に具象化されているとしている[6]。確かに、「塀の中」(1962)、「遠い夏」(1963) などは戦争体験が河野多恵子に与えた影響の深さを示す重要な作品である。しかし、若い河野多恵子を押さえつけたものが戦争のもたらした苦しみだけであったならば、終戦によってすべてのトラウマは少しずつ解消されていったはずなのに、終戦後の河野は男性と同様に思う存分に自己を表現できるとは感じられなかったようである。

> 戦争で子供の頃から抑圧され、自己表現を封じられ、数え年二十の夏まで人生を堰かれていた私は、終戦で解放されたとき、世の中に対して、どれほど激しい期待を抱いたかしれない。そして、そのあまりの激しさのために、私はいつも失望を味わわねばならなくなった。人生とはこんなものじゃあない、もっとすばらしいものであるはずだ、と私は青春時代に思い続けた[7]。

と、河野は戦後の生活に対する失望について語っている。「塀の中」の女主人公が望んでいる「身も心もいきいきと大きく生きはじめる生活をこそ、本当に感じ、思考し、経験することのできる」という世界は終戦になっても実現されていないのではないか。戦争と家父長制という二重の重石を背中に載せられてうめいていた女たちが、半分だけの重石を外されたからといって完全に解放されるに至るわけがないのである。「幼児狩り」の晶子を始め、「たたかい」(1966) の依子、「不意の声」(1968) のうき子、「骨の肉」(1969) の「女」、「回

---

[5] 大久保典夫 (1974)「作家の性意識—河野多恵子」『国文学解釈と鑑賞』39 (14) 11 月臨増 P.189。

[6] 神田由美子 (1981)「河野多恵子—『性と生』との相克—」『国文学解釈と鑑賞』46 (2) P.172。

[7] 河野多恵子 (1974)「五分の魂」『文学の奇蹟』P.14-15。

転扉」（1970）の真子たちは、みんな不妊の女でありながら、「男児嗜愛」やマゾヒズムと呼ばれる「異常性愛」の持ち主である。「狂気」を抱える彼女たちは、「解放」後、法的に男女が平等になった戦後社会で男女関係にしばしば裏切られ、失望、そして無力感や倦怠感に喘ぎ、「身も心もいきいきと大きく生きはじめる」世界を幻想によって追求するしかなかったのである。

現代文学史において河野多恵子は、女性の性を生殖の機能から切り離し、快楽と欲望を追求する女を文学に表現した先駆者といえよう[8]。河野文学に登場する不妊の女たちは母性という役割の束縛から逃れたからこそ、思う存分に女としてのセクシュアル･アイデンティティを追求できる。だが、こういった作品に潜む脱構築的な意味合いと、制度の言説に挑戦しようとする意図は、当時の評論家にはあまり読み解けなかったのではないか。川村二郎は、河野多恵子の作品に頻繁に登場する幼児誘拐、夫婦交換、マゾヒズム、サディズムなどという異常な性愛世界が当時の社会においてはありふれた現象であると説いている[9]。そして、これらのテーマを通して日常生活を支えるさまざまなしきたりに疑問を提示し、ついに崩壊させようとすることによって人間同士のコミュニケーションの仕組みを反省させることが作者の意図であると指摘している[10]。だが、男女を同一視し、女主人公が遭遇した当惑をすべての人間が抱える難問と見る川村が見落としているのは、性差文化の下で抑圧された女性の苦しみである。言い換えれば、河野文学に頻繁に現われる女性のセクシュアリティや母性を覆すなどのテーマがいったん無視されると、作者の性差文化への批判は見落とされがちになるのである。

とはいえ、女性評論家なら男性より河野文学の意味合いを解読できるというわけでもない。神田由美子は、河野文学に登場する病気で不妊になるという女たちの「気質」や「性癖」は作者自身の経験

8 Noriko Mizuta (1995) “Women’s Self-Representation and Transformation of the Body,” *Josai International Review*, 1, p.89.
9 川村二郎（1973）「解説」『幼児狩り・蟹』新潮文庫 P.293。
10 川村二郎、前掲書、P.293。

に起因すると解釈し、「母」となりえない河野が「自然」な欲求が満たされないがために、「倒錯的性愛」と「変則的な男女関係」によって無縁な「母性」を逆説的に追い求めていると説いている[11]。すなわち、不妊による歪められた母性をもつ作中人物（と作者自身？）は、「正常」な男女関係を保てないため、男性のミニチュアとしての男児に対して異常な関心を示し、ついに男児を虐殺してしまうという衝動にかられるというのである[12]。

こういう見解から見れば、神田由美子は、女性の子産み、子育てに関わる活動を、歴史的社会的に規定される「人間の活動」ではなく、女としての天職、自然の営みだとしていると言える。しかしながら、フェミニストが指摘したように、「母性とは社会的な構成物であって、文化的な命法に従い、また出生率の低下や女性の生産活動への参加や核家族の孤立化によって変化する、というものである」[13]。それゆえ、氏が看過したのは、社会的、文化的に構築された「母性本能」の恣意性と人為性である。さらに、「母性」は実は家父長制によって女性抑圧の一形態へと制度化されているものであるため、「母性本能」という概念を内面化した人々は、家父長制の片棒を担ぎ、社会の「規範」にそぐわない人々をさまざまな形で圧迫し、疎外しているかもしれないということにも気づいていないのである。

ウーマンリブとフェミニズムの思潮の影響で、八〇年代以降の文学評論家によって初めて河野多恵子らの女性作家の狂気の表現が女性の視点で見られるようになった。例えば、与那覇恵子はフロイトの思想に従い、河野文学に登場する女性たちの「異常」な傾向を女性のペニス羨望や女性としての性の劣位の認識、母性喪失からくる「倒錯」とみなしている[14]。また、水田宗子もフェミニズムの視点から分析し、支配される女性のあり方を「主体的に演じる」こと

---

[11] 神田由美子（1980）「河野多恵子―母性憧憬の逆説―」『国文学解釈と鑑賞』45（4）P.46-52。
[12] 神田由美子、前掲書、P.47。
[13] マギー・ハム（1999）『フェミニズム理論辞典』木本喜美子 高橋準 監訳 明石書局 P.204。
[14] 与那覇恵子（1986）「河野多恵子論」『現代女流作家論』審美社 P.7-29。

によって逆転させ、「快楽の追究を通して自立させる」と評価している[15]。この二人の学者は共に、河野の女主人公たちが断固たる決意でマゾヒズムの快楽を追究する姿を、女性が自らのセクシュアル・アイデンティティを主張する試みだとみなしている。その点に関して筆者は同感であるが、フロイトの論理に基づいた与那覇は、女の性が本質としては受動的で、去勢されたコンプレックスを持つという、フロイトがよくフェミニストに批判される生物学的結論について抵抗感を持っていないようである。一方、水田は河野の全作品について全般的に見られる傾向と特色を説いているが、「幼児狩り」のテクストについては深い分析が見当たらない。とりわけ、女主人公の男児への加虐行為や殺害という残酷的な幻想に潜むサバーシブな意味合いについては言及していない。

フロイトは「子供が叩かれる」という論文において、ヒステリーや強迫神経症の臨床患者の「子供が叩かれる」という特徴的な幻想の内容に基づき、その幻想の起源、仕組み、発展の過程と潜在意識との相互作用を素描し、性倒錯やマゾヒズムなどの文脈で幻想の特徴を把握している[16]。氏は女性の幻想を三段階に分けている。第一段階は、弟や妹が父親に叩かれている場面を患者が第三者として見ているというものである。第二段階は、患者自身が父親に叩かれている幻想である。第三段階は、少年たちが父親代理（多くは教師）によって叩かれているという場面を目撃することにより、患者が強い性的興奮や自慰的満足を得るというものである[17]。フロイトは第二段階に焦点を当て、幻想の仕組みにおける女性が主体となるマゾヒズムの衝動を軸とし、女性の性愛を体系的にまとめようとする。一方、第三段階において叩かれるのはなぜ少年だけなのか、またなぜこういう幻想が女性の患者に対して強い性的興奮を伴わせるのか

[15] 水田宗子（1991）『フェミニズムの彼方―女性表現の深層』講談社 P.235-245。
[16] Sigmund Freud (1955) “A Child is Being Beaten: A Contribution to the Study of Origin of Sexual Perversion,” in James Strachey ed. & tr., *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Vol. 17. London: The Hogarth Press, P.175-204.
[17] Freud、前掲書。

については深く説明していない。

面白いことに、河野多恵子は「子供が叩かれる」という論文を読んだことがないようだが[18]、フロイトの第三段階に似た幻想を描いている。フロイトの第三段階の幻想にしても、河野文学においての男児に対する異常的な嗜愛や男児を虐殺する幻想にしても、男児が女性の性の幻想の中でどれほど重要な役割を演じているのかということを説明しているのではないだろうか。本稿では、精神分析とフェミニズムの視点を生かし、河野のテクストを深層から読み解き、日常生活ではマゾヒスティックな性愛に耽る晶子がなぜ、また如何にしてエロティックな男児虐待幻想から性の快楽、そして女としてのセクシュアル･アイデンティティを獲得できるのか解明を試みる。

三、幼児狩る女

河野多恵子の「幼児狩り」は昭和三十六年の新潮社同人雑誌コンクールの応募作として執筆され、同人雑誌受賞によって、彼女が文壇に衝撃的なデビューを果たした作品である。「幼児狩り」は次の書き出しで始まる。

> 林晶子は、老若男女の中で、女の子―三歳から十歳くらいまでの女の子ほどきらいなものはなかった。晶子が普通に結婚し、子供を生んでいれば、ちょうどその時期の子供がいることになる。それがもし女の子であったとしたら、自分はどうしていただろう、と彼女はよく考えることがあった[19]。(8)

三十歳を過ぎた独身女性である主人公の林晶子は、「以前よりも一層育児に向かない、母性愛に縁遠い女」であるから、自分の体が結核に蝕まれているがゆえに不妊となったと、医者に告げられたときも、わりに安堵感を覚えるような気持ちであった。彼女は女児に激しい

[18] グレチェン・ジョーンズは、河野が「幼児狩り」を書くとき、フロイトの論文の存在を認識していなかったと指摘している。Gretchen Jones の “Deviant Strategies: The Masochistic Aesthetic of Tanizaki Junichiro and Kono Taeko”を参照。

[19] 本稿における引用は『幼児狩り・蟹』(河野多恵子、1973 新潮社 P.8-38) に拠っている。

嫌悪感を抱く一方、男の子が特別に好きになっていったという。彼女は子供服専門店の店の前を通りかかると、男児用の服をつい欲しくなって買い求め、平素は疎遠であることもかまわず、同僚の子供に贈りに出かけたりする。彼女はプレゼントとして男の子のかわいらしいシャツ・ブラウスを手にし、撫でさすり、次のような場面を空想する。

> 軽快そうなそのシャツ･ブラウスを着た四つくらいの男の子は、夏の間に日焼けした真っ黒な頸筋をしゃんと伸ばしているにちがいなかった。それを脱ぐとき、その子はきっと、ひとりでするよ、と主張するにちがいなかった。丸い短い両腕を精いっぱい体の前で交叉させて、やっとシャツの裾を摑む。だが、それを上へ引き上げるのがむずかしい。眼をつむって、おしりをふって、一生けんめいもがくのだが、しっかりご飯をいただくのではちきれそうになっているお腹が現われたきり、いつまでたってもシャツは脱がれてゆかないのだ。(12)

男の子がぎこちなく服を脱いでいる模様を想像することによって、晶子は言葉にできない喜びを感じるのである。

晶子は二つ年下の佐々木という会社員と共通した性癖で結ばれている。ある夜、彼女は佐々木に真珠のネックレスで背中の肌を打つように頼み、糸が切れると、両端にプラスチックの小片や金具がついている干し物用のビニールロープに目をとめ、そのがちゃがちゃするほうで打ってくれとせがむ。しまいに佐々木がロープで晶子ののどをがんじがらめに縛り付けひどい悲鳴をあげさせた。二人の大騒ぎは隣人にうるさくて迷惑だと文句を言われるまで続いた。窒息で瀕死状態となった晶子は、三十分後やっと意識が戻った。だが、マゾヒスティックな性愛による肉体的な快楽だけでは晶子を満足させず、「自滅行為に近いような無謀な快楽」(34)のあとは、ひとしお男児を恋うのである。

彼女の人に知られたくない幻想の世界に登場するのはいつもかわいらしい七つ、八つの男の子と父親である三十代の男である。父親

は叱りながら裸になった子供のお尻をベルトで引っぱたいた。すると、どこかである女の声がし、その代わりにステッキにしたら、と父親をそそのかした。ついに、女にせきたてられた父親は子供の両手を頭上で縛り、樹の枝から吊り下げ、最後に残っている腹部を攻撃し、美しい紫色をした紐状の内臓を流れ出させた。最後には、父親は女が言った通りに、子供を吊り下げてある縄を切り、その紫色の紐で凧を揚げるように、子供を振り回し始めた。「子供の体は屢々トタンづくりの小屋に打ちつけられた。そのたびに、裂くような悲鳴がおこるのだった。—」(29)、というような夢想であるが、その加虐的な行為は凄絶である。しかしながら、晶子はその凄絶な幻想により「心臓を波打たせ、たらたら汗を流す」(26) ほどのわれを忘れる恍惚状態になるのである。

最後のシーンでは、晶子は銭湯の帰りに、通りすがりの子供の齧りかけの「どろどろになっていて、生ぬるく」「子供の汗と垢と唾液にまみれた西瓜」を「舌を縛るようにして親しむ」(37) ということに、性的刺激を受ける。

四、ハイブリッドな女性のセクシュアリティ

「幼児狩り」の冒頭で示されたように、晶子の女児に対する嫌悪感は、蛇や蛙を嫌う人が持つそれぞれの小動物に対する不快感に近い。その粘着的体感を伴う生理的な嫌悪感は言葉でも明確に説明できないようなものである。

> その晴れわたった空の中で、当時の彼女の気分のそこには、不思議な冴えない感じがつねにあったのである。それは、低い長いトンネルの中をどこまでも歩いて行かなければならないような、全身から目に見えない粘液がにじみ出ているような、何かに呪われているような、感覚に迫る、いまわしい、うとましい気分であった。理科でカイコのことを教わった、先生のメスが繭のひとつを断ち割って、その半洞に、かすかにうごめいているさなぎを見たとき、わが身から生じた糸に巻き籠められたさ

なぎの息苦しさ、暗さ、その姿のいやらしさに、晶子は自分につき纏う気分を見たような気がした。(9)

そして、こういった感覚は自分だけの固有のものではなく、自分と同じぐらいの女の子にもあると晶子は確信している。晶子が女児に抱いている感覚は精神分析者が説く「無気味なもの」(the uncanny)に類似している。無気味なものとは、「古くから知られているものや昔からなじんでいるものに還元されるところの、ある種の恐ろしいもの」ということである[20]。つまり、もっとも身近なものがもっとも疎遠なものに感じられるように抑圧された後に、再び現れるという無気味さである。究極的には、母の胎内を指すということである。言い換えれば、繭は晶子に子宮を連想させ、そして少女として自分の体の中にもある子宮という生理構造に対する無気味さを思い出せるのである。

一方、「ただ、いつからそうだったのか、気がついたとき、晶子は、同じその時期の男の子が格別に好きになっていた」(10)と、女児に対する嫌悪感に逆比例するように晶子の男児への執着は日に日に増してくる。

晶子にとっては、小さい男の子のいるところ、いつも限りない健康な世界があるのだった。自分を清め、還元してくれるような気がする。が、その世界があまりに深く広いので、自分の持っている一切の奇妙なものをも受け入れ、それとつきあい、励ましてくれるようでもあるのだ。(38)

与那覇恵子はフロイトの論点から、「幼児狩り」における二項対立的に表象される女児への嫌悪感と男児への執着を、少女としての晶子の「自己のコンプレックスの投影であり、男性に対するコンプレックスのあらわれでも」ある、と論じている[21]。しかし、ペニスという性器官の在／不在という解剖的な性差の有無により、「男性の優越性と女性の劣等性」を決めるのは、生物学的本質論になる恐れが

[20] 西園昌久監修(2008)『現代フロイト読本 2』みすず書房 P.484。
[21] 与那覇恵子、「河野多恵子論」『現代女流作家論』P.11。

ある。なおさらに、こういう精神分析的記号作用には、実は家父長主義的権力構造やその機能が密接に関わっていることを見逃す可能性も潜んでいる。

ラカンはフロイトの精神分析を構造主義的に見直し、コギト解体の傾向へ押し進めた。人間を規定する「無意識の構造」、あるいは他者の言語を解明するために、ラカンは主体性を構造的に三つの段階に分ける。まずは混沌の世界、幼児の感覚がばらばらに散らばる「現実界」である。次は、母親に指示された自分に自分を一致させ、感覚が統合される「想像界」である。最後は父親という絶対的存在のものと言葉を獲得し、同時に秩序ある世界に入る「象徴界」である。換言すれば、人は鏡像段階を経て主体性を獲得し、言語に介入されるということ、すなわち象徴界へと参入するということであるとされる。象徴界とは社会の様々な掟であり、父であり、言語であるという図式から成る[22]。

ラカンによれば、象徴的な掟とされる「父の名」を受け入れる過程は、幼児の全能性であるファルスを傷つけることという意味で去勢と呼ばれる。この去勢によって、人間は自分が全能ではないと言う事実を受け入れ、不完全な自己を逆に積極的に確立するのである。幼児の性的発展における決定的瞬間は、母親は持っていないファルスを欲望していると、幼児が知覚するとき、その欲望を満足させるために、ファルスであることを望むということである。実際にファルスを持っている男児には問題がないように見えるのに対して、女児は誰かのためにファルスである必要がある。だから、ラカンは男性をファルス「を持つ」位置に、女性をファルス「である」位置に排他的に位置づける。すなわち、実際にファルスを持っている男性は去勢不安に生じる社会的わたしになり、一方ファルスを持っていない女性はペニス羨望によって生じ、ときに去勢の脅威を行使する、社会的わたしになる。それゆえ、女性は誰かのためにファルスであ

[22] ラカンの鏡像段階論については、斎藤環の『生き延びるためのラカン』と、Toril Moi, *Sexual/Textual Politics: Feminist Literary Theory* を参照した。

る必要があり、ファルスになろうとして、そして「他者」の欲望のシニフィアンになろうとして、女性性の本質的な部分を見捨てる。このように、欲望の主体位置としての男性と、男性の欲望を反映する女性の非対称的関係が父の法によって強制されている[23]。

晶子の女性の生理構造に関連する無気味さは、女性にファルスという特権的なシニフィアンが欠如しているための去勢不安によるものだといえるであろう。記号的に欠如しており、無力感にとらわれる女児は、自分の体に潜む「女」という性そのものを嫌悪し、ついに、ファルスを持っている男児という対象に転移し、男児を自分の欠如を補うための代理とし、自分の欲望を男児に投影しながら、追求するのである[24]。では、晶子はいかにして男児を虐待する凄絶な幻想において男児と同一化することにより、自分の性的欲望を満たすのか。

現実の世界では晶子は年下の佐々木に虐待されることに、性愛の喜びを感じているのである。しかし、この場面で留意しなければならないのは、佐々木は晶子の意向にそって加虐者の役割を担わされていることである。すなわち、一見晶子は被虐され、支配されているように見えるが、実は、彼女は佐々木を快楽を追求するための性愛の道具としているのに過ぎない。こういったサド・マゾ的性愛関係において、主導権を握っている晶子は主体的にマゾヒズムを求めることによって、男女の支配―被支配という力関係を逆転させるのである。だが、精神分析学者が指摘したように、女性のセクシュアル・アイデンティティの確立には去勢という欠如の媒介、昇華が必要であるから､決して安定した秩序を持つことはないとされている。したがって、生殖の機能を持たない女として、晶子の快楽を追求するマゾヒズムは昇華、統合されにくいのである。また、従来生殖という記号が身体（子宮）に根強く付与された女性は、自身による身

[23] Jacques Lacan (1977), "The Signification of the Phallus" in *Écrits: A Seclection* transl. by Alan Sheridan, New York: W.W. Norton & Co..

[24] Nagaike Kazumi (2005), “Japanese Women Writers Watch A Boy Being Beaten by His Father: Male Homosexual Fantasies, Female Sexuality and Desire,” Ph.D. Thesis, The University of British Columbia.

体の消費としての快楽を追求するのは必ず懲罰を伴うというタブーと見なされるため、性的な快楽によってセクシュアル・アイデンティティを統合するのは女性にとって無縁なものと位置づけられてきた。晶子が主体的に追求するマゾヒズム的快楽は、水田の言葉を借りるならば、「子宮はその快楽を生殖から解放できても、子宮そのものを生殖にとらわれた心から開放することはできない」[25]という羽目に陥るため、幻想の世界を通してバランスをとらなければならないのである。

幻想の世界において、男の子が父親に凄絶に折檻されている場面を傍観者として眺めている晶子は、日常生活でのマゾヒズムの役割を逆転し、サディストになっているように見えるが、実は心的構造が不安定な晶子はマゾヒズムとサディズムの両方の役割を演じていると思われる。フロイトの第三段階の幻想と同じように、男性同性愛的なエロティシズムを窃視することにより、女性の欲望と興奮を促進するという働きは晶子の幻想にも見られる。ローラ・マルヴィ（Laura Mulvey）は見る主体としての行為と欲望の構造をはじめてフェミニズムの視点から解明し、映画が見世物の媒体として視線との関係において性差を規則化することを論じている[26]。氏によれば、元来男性は見る主体、女性は見られる客体とされてきたから、男性のまなざし（gaze）を中心に構造化されているハリウッド映画における視線は、家父長制的な社会のイデオロギーをそのまま反映した男性中心主義的なものである[27]。しかしながら、晶子の幻想は、こういったまなざしの性差的なヒエラルキーを逆転し、女性を見る主体として、父親と男の子のエロチックな演出を見るという行為を通して、ジェンダー的ヒエラルキーを脱構築しようという試みであるといえるだろう。そして、幻想において、父親の折檻を煽り立てる正体のはっきりしない女は晶子と見なされるから、父親と男の子と

[25] 水田宗子（1993）「女性表現と身体の変容」『批評空間』第 8 期 P.199。
[26] Laura Mulvey (1975). "Visual Pleasure and Narrative Cinema," *Screen* 16(3): 6-18.
[27] Mulvey 前掲書。

の演出を満喫する、支配者の位置に身をおいている晶子はサディスティックな快感を覚えることができると思われる。

ところで、「幼児狩り」における女性の男性同性愛幻想は、「やおい」という女性読者のために創作された男性同性愛をテーマにした漫画にもよくみられる。たとえば、竹宮恵子の『風と木の詩』や萩尾望都の『残酷な神が支配する』などの少女漫画である[28]。これらの少年愛漫画の特徴は舞台として、読者の現実から大きくずらされた時代や空間がその舞台として設定されることである。「ある種の寄る辺のなさに潜む浮遊感は、読者である女性たちの現実世界からの乖離を容易にし、物語への密着をさらに深めさせて」[29]いくという働きは晶子の幻想世界にも見られる。メアリー・アン・ドーンによれば、こういった女性の男性同性愛幻想は、女性が「生存の性的側面から逃れる」無意識の行為であると論じている[30]。元来女性が本質として受動性を持つとされるため、マゾヒズムの快楽を追求するのは性の他者として記号化されるため問題化されることはないが、女性が性の主体として快楽に耽溺するとタブー視されるから、それによって生じるのはアイデンティティの不安定さである。晶子は現実世界に遭遇した性的抑圧や混乱を、幻想においてのマゾヒスティックな男の子に投影し、無意識的に男の子の身体と同一化することによって、父親によるマゾヒスティックな折檻を享受するのである。

カジャ・シルバーマンは「子供が叩かれる」の第三段階の女性の男性同性愛幻想における叩かれるのはなぜ男の子なのかについて分析している。氏によれば、第三段階に表象されているのは、愛される/懲らしめられるのは男の子でなければならないという願望、

---

[28] フランスを舞台にした『風と木の詩』(1976) は、思春期の少年たちを中心とする物語であり、少年同士の性交渉、レイプ、父と息子の近親相姦といった過激な描写は当時センセーショナルな衝撃を与えた。一方、萩尾望都の『残酷な神が支配する』(1997) はアメリカを舞台にするが、同じく近親相姦、同性愛などの問題を、ある一家の性的な確執を中心に描いた漫画である。

[29] 藤本純子 (2001)「女性の『性』をめぐる眼差しの行方－少女マンガとしての“男性同性愛作品”の変容を手掛かりに－」『大阪大学日本学報』20 P.141。

[30] アン・カプラン著・水田宗子訳 (1985)『フェミニスト映画　性幻想と映像表現』田畑書店 P.40。

父親に男の子のように叩かれたいという願望、そしてより通常化された場面で男性の主体としての位置を占領したという三つの願望である[31]。しかし、重要なのはこれらの願望は男性性より、女性性の記号を媒介として成り立っていることである。つまり、男性の身体の表象を媒介とした「借り物」の女性性に想像上の接触をする可能性が女性の主体に与えられている[32]。別言すれば、晶子が自分の幻想において、折檻する父親の代わりに、折檻される男の子と同一化するのは、まだ男性性を完全に手に入れていない男の子が借り物の女性性を包含することにより、女性性を持つ性の複合性を表象されるからであると思われる。晶子は現実世界で抑圧され、タブー化されたマゾヒスティックな性愛を幻想世界の男の子に投影し、男の子の性的身体に化身した晶子は父親とのエロチックな演出を味わい、男の子のマゾヒスティックな欲望と快楽と同一化する。それと同時に、男の子の生物学的異質性を認識した晶子は男の子と分離し、客観的な距離をとって父親と男の子との演出をサディスティックな目で見ている。同一化と分離という二つの心的プロセスにより、晶子は男性同性愛の要素を媒介しながら、サディズムとマゾヒズムの間を揺れ動く自分のセクシュアル・アイデンティティにおけるアンビバレンスを安定させようと試みているのである。

現実世界にいる佐々木と同様に、幻想世界にいる父親は女の性的欲望を満足させるという存在に過ぎない。晶子のセクシュアル・ファンタジーにおいては、父親はまるで女の欲望を十分理解しているように、「灼けたトタンの凸凹がみごとな赤銅色の縞目を生じさせた、子供のやけ爛れた背中を女の方へ向けてみせ」(28)、しまいに、「子供をつり下げてあるナワを切るように」という女の要求に抵抗なく従った。観客の立場で親子のエロティックな舞台を堪能する女は、一見従来の男性の優位的支配的な見る主体の立場を奪い、階層的な二項対立を逆転しているだけで、結局はやはり二項対立のロジック

[31] Kaja Silverman (1992) *Male Subjectivity at the Margins*. New York: Routledge. P.203.
[32] Silverman 前掲書、P.204。

にはまっているように見えるが、この支配的な他者としての女性が具象化する性愛は、フロイトが説く単一的な欠如で表象されるものを逸している。フロイトが定義した、男性性器の等価物をいつか所有したいという形でしか自己の欲望を生き得ない女性性は、ここではリュス・イリガライが論じたような、複合的、拡散的、そして常に変動する性愛となる[33]。イリガライは「一つではない女の性」において、男性主体が規定した法とモデルの世界、すべてを同一性に還元してしまう男根中心主義を非難しながら、男女の自体愛を区別している。

> 男は自己に触れるのに手や女性性器や言葉...などの道具を必要とする。そして、その自己愛は最小限の行為を要請する。が、女の方は媒介を必要とせず、また、能動と受動とのあらゆる可能な区別以前に、自己により、自己の中で、自己と触れあう。女は絶えず『自己と触れ合って』おり、しかも、それを禁じることはない。というのも、女性性器は絶え間なく口づけしあうふたつの唇でできているからである。だから、ひとりの女において、女はすでにふたり、しかし、ひとりずつに分離できない、愛しあうふたりなのである[34]。

男性的言説から離れなければ、女性性は男根形態主義を特権化する「象徴界」により、「何も見るべきものがない恐怖」[35]と表象され、そして単一的、ヘゲモニー的ジェンダー記号に封じ込められるのである。だが、クリトリスや膣などの多様的な性感帯を持つ女性は、実は複数的な思考様式の可能性を持つセクシュアリティを内在させている。現実世界においても、幻想の世界においても、晶子が体現したのは、まさにイリガライが論じたような、短絡的なジェンダー権力構造を超越した、幻想を媒介としたハイブリッドで複合的、複雑、微妙な性愛である。

---

[33] リュス・イリガライ（1998）棚沢直子訳「ひとつではない女の性」『ひとつではない女の性』勁草書房 P.23-37。
[34] イリガライ 前掲書、P.24。
[35] イリガライ 前掲書、P.27。

その上に、晶子の複合的な女性性は、表象と欲望を窃視症的レンズによって分類する精神分析の性欲理論とは異なり、視覚のみによって快楽を享受するのではなく、味覚によるものも絶え間ない快楽をもたらしているのである。この味覚の性愛、とりわけマゾヒズムの味覚は、「幼児狩り」のラストシーンの子供の汗とよだれにまみれたスイカを食べる場面に見られるほか、「骨の肉」という別れた男との快楽の回想をテーマにした作品にも出ている。同じくサド・マゾ関係の男女関係を持つ女は、男の食べた後の鶏肉の骨や牡蠣の殻に残った肉を食べることを最上の快楽として享受する。

> フォークの先が漸く白い肉のかけらを得て、女の唇にそれを擦りつけた。女は自分の唇がその肉のかけらをしっかり挟んで離したがらず、舌は一時も早く自分の番になりたがって立ち騒いでいるような気がした。（中略）フォークは一層肉のかけらを、剥がしかね、剥げても捕えかね、漸くそれを口許へ運ぶ時にも震えていた。女はフォークと牡蠣殻とを夫々に持った両手を宙に浮かせたまま、唇と舌とがまた肉のかけらを奪い合うのをじっと味わった[36]。

このような繊細な描写は、女性の性癖を巧みに伝えている。わずかなものをはがして食べることによって女に性的快感を与えるのも、女性の欲望の豊富な多様性を示しているのではないだろうか。

五、おわりに

日常的にはマゾヒスティックな性愛を積極的に追求する晶子は、客体化される状況を主体的に作り出すことによって生じるアイデンティティの不安定さを和らげるため、または男性言説に支えた現実世界では叶えられない欲望を満足させるために、狂気な幻想世界を築く。無意識的に幻想において自分をマゾヒスティックな男の子に投影し、男の子の身体と同一化しながら、距離を置いて父親と男の子のエロチックな演出をディスティックなまなざしで味わう。現実

[36] 河野多恵子（2009）「骨の肉」『現代短編女性文学』おうふう P.34。

世界での晶子のマゾヒスティックな性愛は、幻想世界での女のサディスティックな性愛と相互に作用して、女性に特有のセクシュアル・アイデンティティが、想像されるよりはるかに多様で、複雑に表象されている。

父親と男の子による男性同性愛の幻想を通して、河野多恵子の「幼児狩り」は、脱構築的な手法で、ジェンダー的家制度、そして異性愛制度などのヒエラルキーを転覆させようとしていると思われる。また支配的男根体制の下では性的快楽とは無縁と位置づけられる女性の性愛をファンタジーによって、抑圧された女性的想像に戻すことで、ハイブリッドな女性のセクシュアル・アイデンティティを見出すことができるのである。

参考文献

アン・カプラン著・水田宗子訳（1985）『フェミニスト映画　性幻想と映像表現』田畑書店

大久保典夫（1974）「作家の性意識―河野多恵子」『国文学解釈と鑑賞』39（14）11 月臨増 P.186-193

神田由美子（1981）「河野多恵子―『性と生』との相克―」『国文学解釈と鑑賞』46（2）P.171-173

河野多恵子（1973）『幼児狩り・蟹』新潮社 P.8-38

河野多恵子（2009）「骨の肉」『現代短編女性文学』おうふう P.29-39

斎藤環（2006）『生き延びるためのラカン』バジリコ

柘植光彦（1979）「現代女流作家における性表現」『国文学解釈と鑑賞』44（5）P.118-126

西園昌久監修（2008）『現代フロイト読本 2』みすず書房

藤本純子（2001）「女性の『性』をめぐる眼差しの行方―少女マンガとしての“男性同性愛作品”の変容を手掛かりに―」『大阪大学日本学報』20 P.133-152

水田宗子編集（1991）『ニュー・フェミニズム・レビュー 2　女と表現―フェミニズム批評の現在 vol.2』学陽書房

水田宗子（1993）「女性表現と身体の変容」『批評空間』第 8 期 P.196-207

吉川豊子（2009）「骨の肉　河野多恵子」『現代短編女性文学」おうふう

リュス・イリガライ（1998）棚沢直子訳『ひとつではない女の性』勁草書房

与那覇恵子（1986）「河野多恵子論」『現代女流作家論』審美社 P.7-29

与那覇恵子（1998）「河野多恵子」『女性作家シリーズ』角川書店 P.426-433

Jones, Gretchen (1999). “Deviant Strategies: The Masochistic Aesthetic of Tanizaki Junichirō and Kōno Taeko,” PhD Thesis, The University of California-Berkeley.

Lacan, Jacques (1977). "The Signification of the Phallus" in *Écrits: A Seclection* transl. by Alan Sheridan, New York: W.W. Norton & Co..

Moi, Toril (1988). *Sexual/Textual Politics: Feminist Literary Theory.* New York: Routledge.

Mulvey, Laura (1975). "Visual Pleasure and Narrative Cinema," *Screen* 16(3): 6-18.

Nagaike Kazumi, (2005) “Japanese Women Writers Watch A Boy Being Beaten by His Father: Male Homosexual Fantasies, Female Sexuality and Desire,” Ph.D. Thesis, The University of British Columbia.

Schierbeck, Sachiko (1994). *Japanese Women Novelists in the 20th Century 104 Biographies 1900-1993*, Copenhagen, Denmark : Museum Tusculanum Press, University of Copenhagen.

Sigmund Freud (1955). “A Child is Being Beaten: A Contribution to the Study of Origin of Sexual Perversion,” in James Strachey ed. & tr., *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Vol. 17. London: The Hogarth Press, P.175-204.

Silverman, Kaja (1992). *Male Subjectivity at the Margins*. New York: Routledge.